

## 魂という通奏低音（本の紹介）

**タイトル:『死と生についての五つの瞑想』**

**『魂について——ある女性への七通の手紙』**

**著者名:フランソワ・チェン**

**訳者名:内山憲一(フランス語学科 1985 年卒業)**

**出版社:水声社**

**定価:各 2,000 円＋税**

昨年の秋から冬にかけて二冊の翻訳書を出しました。フランソワ・チェンの作品です。その名前から推察できるように中国出身ですが、フランスに帰化した文学者、一九二九年生まれで存命中です。苦勞の末に獲得した言語で執筆した処女小説『ティエンイの物語』で、フランスの文学賞の中でもゴンクール賞に次いで著名な賞の一つフェミナ賞を一九九八年に受賞、二〇〇二年にはフランス学士院を構成する五つのアカデミーの中でも四百年近くの伝統を誇り、終身制である四十名の会員は「不滅の人」と称えられるアカデミー・フランセーズにアジア系初の会員として迎え入れられるなど、現代フランスの詩人・作家として揺るぎない評価を得ています。

日本ではほとんど知られていませんが、邦訳はすでに二点ありました。みすず書房から刊行されている二つの小説『ティエンイの物語』『さまよう魂がめぐりあうとき』（いずれも辻由美訳）です。今回それにフランス文学の翻訳では定評のある水声社から刊行の拙訳二作がつけ加わることとなりました。『死と生についての五つの瞑想』、及び『魂について——ある女性への七通の手紙』です。

既刊の小説二作に対して、私が手がけた二作のジャンルはどう言ったらよいのか、実は訳者としても少し迷ってしまいます。『死と生についての五つの瞑想』のうち最後の瞑想はすべて、「変容した言葉」である詩という形で語られています。『魂について』の方は、部分的には小説のように読むことができます。一方はそれほど大人数ではない知己を中心とした連続講話をまとめたもの、他方は書簡体の作品です。結局二作とも、中国思想と西洋思想の交差するところに立つチェンの深い思索が、なによりも詩人であることを自認する人の美しい言葉で綴られている哲学的エッセーといったところでしょうか。

『死と生』においては、詩の分野でもいくつかの受賞歴のあるチェン自身の詩、フランスに限らずルリケ等の西洋の詩や哲学者たちの言葉、そしてチェンの祖国からは老荘思想や杜甫、王維などの引用がちりばめられ、気楽に読めるような死生観本とは一線を画す格調高い文学書となっています。『魂について』にもチェンの詩や哲学者たちの言葉が多く引用されています。詩人チェンが最も重視している哲学者はシモーヌ・ヴェイユであり、同書「第

六の手紙」全体がこの女性哲学者にあてられています。二つの大戦を生み出した二十世紀前半を、まるで宮沢賢治を思わせるように激しく不器用に駆け抜けた人です。チェンはその生涯を「魂への歩み」と評しています。

近代以降の西洋において、この「魂」は等閑視あるいは無視され、精神－身体の二項が圧倒的優勢を誇っています。これに対して、チェンは人間の中に魂という審級を認めます。魂と精神は補完的あるいは弁証法的な関係にあり、精神の役割は「中心的」であるが、魂のそれは「根本的」としてしています。また生という「冒険」のあいだに人は渇きや飢え、苦しみや喜びを抱え込みますが、それらすべてのものは身体や精神を通して魂に吸収されるといいます。詩人によると、この魂は一人ひとりの単一性を表す「通奏低音」です。

この「通奏低音」という比喻に関するエピソードが『死と生についての五つの瞑想』で語られています。渡仏直後の一九五〇年代初頭、異国の地での実生活にうまくでき適応できず、孤独に苦しんでいたチェンの数少ない友人のうちの一人に、上海出身の同胞の青年がいました。フランス語で覚えた最初の音楽用語のうちの一つ「通奏低音」は、その友人が教えてくれたものです。ところがその音楽家の卵は、妻と生まれたばかりの女兒を残して不慮の事故で急死してしまいます。それから半世紀以上経た詩人の魂の中で、その悲しみの思い出は厚い堆積に埋もれていました。

ところが、まさに四番目の「瞑想」を準備している最中のチェンのもとに、一通の手紙が届けられます。差出人は件の友人の遺児、チェリストとしてアメリカで活動しているセシリア・ツァン。父のことを語ってくれませんかという手紙でした。その願いは齢八十を超えた老詩人を六十年以上も前、まるで「過去生」であるかのように遠い昔に一举に連れ戻しました。セシリアの演奏はラジオの「フランス・ミュージック」で聴いたことがあり、そのときには「父上の魂が彼女に乗り移った」と感動したそうです。けれども、手紙を受け取るまで面識はありませんでした。心を動かされた詩人は彼女に一篇の詩を送ります。

肉をまとった魂 あの各人の通奏低音  
他のものが触れるとそれは  
震え 鳴り響く

そのときゆっくりと立ち上がるもの  
覚醒し それから驚嘆し  
覚醒させ それから魅惑し  
揺籃期のあの歌  
かつて朗々と響き渡り それから忘れられ  
長いあいだ埋もれ それから想起され  
現在をその満ち足りた頂から朗唱し  
そこでは花開いた百合がついに星にたどり着き...

存在とはまさにこの音楽ではなかろうか？  
始まりからずっと  
だれかに聞いてもらおうとして  
待ちつづける  
日ごとのあらゆる瞬間に  
そして一つの生のあいだ毎日  
ついに手が堅琴に触れることを覚えるときまで

この詩に感動したセシリアはそれを楽曲にしたいと申し出ます——「曲は『百合と堅琴』と名付けることができますと思いますが、いかがでしょうか？」 実に見事なタイトルだと詩人は思いました。二つの語の音韻的なつながりが、百合と堅琴という存在とのあいだのつながりを喚起しているからです。その絆は、いずれ朽ち果ててしまう百合と堅琴が奏でる永遠の歌のあいだに必ずや生ずる「変形と融合のプロセス」を示唆するものです。老いた詩人の心にはただちに次の美しいイメージが湧きあがりました——「ある日、百合が花開き、堅琴となる。」

このエピソードは、「魂から魂への伝達というはっきりした感覚、どこかで何かがついに完遂したという奇妙な確信」を与えるものであるとチェンは語っています。それは私自身も実感したことです。この詩篇を日本語に移し替えながら、目頭が熱くなってくるほどでした。「詩」の力はある、とあらためて思いました。自らも詩作する者として原著の格調は保ちながら、日本語としてできるだけ読みやすい訳文になるように心がけたつもりです。

投稿者：内山憲一 フランス語 1985年卒業